

佐伯地方の姓氏(八)

清家氏と山田氏

佐脇貫一

(会員・佐伯市長)

◇ 全国的に珍らしい清家氏

全国的に見ても清家という苗字(姓)は珍らしい。大分県内でも佐伯地方を除くと数が少なく、他県では海一つ隔てた愛媛県に多いようだ。もっとも苗字研究家の佐久間氏によると、清家姓は愛媛県とくに南伊豫地方に多い姓の一つになっている。

佐伯地方の清家姓は、ほとんどが大入島の荒網代浦で、島内各浦にある清家姓も、また佐伯市内(旧市内)の清家姓も、その出身地を調べると大半が荒網代浦、次が鶴見町沖松浦、そのほか愛媛県(宇和郡出身)が少しある。

私の集計では佐伯市・南郡の概数の約七割が旧佐伯市内と大入島、二割あまりが鶴見町、その他が蒲江町ということになっている。

清家姓のもっとも多い大入島荒網代浦は、昔から平家の落人が住みついた所といわれ、部落民の、とくに婦人のことば(訛りなまり)には特有のアクセントがあって、標準語教育が行きわたるまではなかなか解消しなかった。荒網代浦東端の元ヶ鼻の小丘上に「東島古墳」がある。これは明治三十四年(一九〇一)に村民が発掘したという原始的箱式石棺で、佐伯地方の古墳では遺構の残る唯一のもの、だいたい六世紀ごろの築造と推定されている。村民の話では、発掘したとき棺内に刀剣・曲玉などがあったが、崇りがあったので丘上の浄地に埋め、石祠を建てて祭ったという。(東島古墳石棺は昭和四十八年一月市史跡指定)

佐伯市史は東島神社(荒網代港外の東島に鎮座)について次の記述をしている。

荒網代元ヶ鼻の東島古墳を祀ったもの。古来より山王権現社として同浦の氏神であったが、古墳発掘後、東島に移祀された。山王権現とは日吉神社（大比叡大明神）の別称、本地垂迹説によって天竺の摩陀羅神をわが素戔嗚尊として権現祭祀し、山王と号したという。

この古墳は大正十一年（一九二二）県史蹟名勝天然記念物調査委員の手によって再発掘調査されたが、遺構からは何物も発見できなかった。しかし、調査委員の一人であった郷土史家故佐藤鶴谷翁は、その晩年私に次のような話をしてくれた。

「荒網代浦の人々は、この古墳を先祖の塚として尊崇しているが、それはこの浦に伝わる平家落人の伝承と関係がある。荒網代浦に多い清家（約百戸）・丸山（約三十戸）などの苗字は、明治五年以降の戸籍簿登録時代につけられたものだが、清家というのは平家をもじったもの、丸山は東島（元ヶ鼻）の円墳をさしたものである。この浦に伝わる年中行事に、いわゆる「都ぶり」を思わせるものが多いことも、落人伝説の拠りどころとなろう。」

それはともかくとして、清家姓について考えてみよう。

一般に苗字（姓）の起原は地名であるといわれるが、清家という地名は佐伯地方のどこにもない。県内では大分市（旧市内）に勢家（せいけ）があるが、訓みは同じでも清家姓との関連は考えられない。もっとも大友氏四代因幡守親時の子に勢家四郎藏人師親という人物があったが、この人は母方の一族河野彦五郎（伊豫河野氏の一族か）という御家人の猶子になったと伝えられる。（群書類従本、藤氏大友系図によると、師親は大友四代親時の四男、四郎または藏人と称し、従五位下因幡守に叙せらる。法名正清、勢家と号したがまた野津、利根とも号す。母は志多里氏）

このほど豊後国志を繙ひもといていて「清家」という地名が県内にあることを知った。それは速見郡日出町川崎地区の小字で、城下しろしたで著名な日出港に近いところ、現在の地名が残っているかどうかはわからない。

寿永四年（元暦二年・一一八五）二月、壇ノ浦に敗れた平家の一族平教次（弾正忠）、平武光、平宗行の三士は、この日出の湊に落ちて来、川崎の清家に隠れ住んだという。鶴谷翁のいう清家は「平家」をもじったものという伝承もどうやらこの伝説からきているようだ。

清家が平家と関係のないことは音韻の上からもはっきりしているが、日出町川崎地区の旧小字に清家という地名があること、その清家に平家落人の伝承があることは、清家姓の広がりから考えて、この姓が豊後・伊豫の海民の姓であることを示唆する。

◇ 明経家清原氏と関係はないか

わが国の姓氏でもっとも繁栄したのは源平藤橘の四姓で、このうち源平橘の三姓はいずれも一字姓、藤原氏だけが二字姓であった。そのため藤家と略称したが、これが一つの慣例になって、菅原氏は菅家、大江氏は江家とよばれた。

平安時代中期になると、祭祀、巫占みこころは、学術、医術等の専門職貴族ができた。そのなかに明経儒家（律令制の大学で経書を専攻した儒学者で、朝廷の師家になるもの）とよばれる博士家が二家あった。中原氏と清原氏で、代々博士または助教、直講などをつとめ、官は大外記、左右大史にいたった。この中原、清原の両氏を、一条天皇の頃から中原氏を中家、清原氏を清家とよぶようになった。

清原広澄は儒学を海宿祢あまのすね吉柯よしかに学び、吉柯の養子となつて海宿祢広澄と称し、朝廷の大学寮に入ったが、やがて明経学者として頭角をあらわすようになった。広澄は実父業恒なりつねが天武天皇の皇胤である清原真人まひと姓であるところから、寛弘元年（一〇〇四）十二月、朝廷に請うて海宿祢を改め、清原真人姓を賜った。以来明経家広澄の後は清原氏を称し、堂上貴族の間では「清家」とよばれた。

さて、明経家の清原氏とは別に、豊後にも清原氏がある。それは玖珠清原氏で、平安時代初期、玖珠郡大領になったという清原正高の子政道の後である。玖珠二十四家といわれる長野・古後・山田・帆足・恵良・野上・志津利・平井・飯田・横尾・松木・森・今村・原口・笠・小田・魚返・綾垣・蘭田・右田・須恵・原田・葎原・大隈各氏はいずれも清原氏、政道の裔と称している。

玖珠清原氏の始祖という豊後介清原正高は、朝廷に仕えていたときは少納言の位にあり、罪を得て豊後介に左遷されたと伝えられるが、尊卑文脈等の清原氏系図には正高（政高）という人物はなく、正高が朝廷に仕えていた時代（寛平二年前後）少納言に任ぜられたのは従五位上侍従大江公幹である。この時代、清原氏で最高位だっ

たのは従五位上豊前守清原真人惟岳で、正高の父と伝える清原通雄は従五位上駿河守であった。

明経家の清原氏に、地方に下って清家を称したという伝承はないが、在庁官人となり武士化したものもある。

玖珠清原氏もその一例であるが、次のような族党もある。

大宰官人であった進三郎大夫平季房の子といわれる季能は大宰大貳平清盛の家人になったが、季能の本姓は清原氏で、明経家大外記清原定隆の後で豊前介貞長の実子であったという。この豊前介貞長もまた平氏の家人だったといわれ、その出身は豊前紀清党に属する宇佐の神人であったともいわれる。(宇佐宮の神人には紀氏や清原氏の裔を称する者が多く、その族党を紀清党といった)豊後・伊豫の海岸部に多い清家氏は、案外豊前紀清党の末流で、ある意味で平氏に縁故の深い一族であったのかも知れない。そう考えると日出町川崎の清家も、由縁ある地名として生きてくる。

◇ 荒網代にあるその他の姓氏

荒網代浦には清家氏のほかに、丸山、瀬山、古戒など特有の苗字がある。このうち丸山氏は、丸山まるままたは田山

の地名が各地にあるため、全国的な姓氏になっている。

佐伯地方の丸山姓は清家姓と同じように、旧市内は別として海岸部に多く、とくにまとまって多いのは荒網代浦(約三〇戸)である。私は荒網代浦の丸山姓は塩内浦の団塚姓とともに東島古墳(円墳)の地形からきたものと思っている。しかし、もし清家氏とともにこの浦に移り住んだ落人の一族ということになると、丸山氏には清原源氏武田氏族、藤原南家流勝間田氏族、桓武平氏梶原氏族などがあるから、どの系統かで丸山の地名に縁故をもつものとなるが、これを佐伯地方の丸山氏に当てはめてよいかどうか。

瀬山、古戒もこの浦特有の苗字である。瀬山は背山と解し、あるいは瀬に面した島山と解して、地形による苗字とわかるが、古戒となるとやっかいだ。海底で光る白石を祀る風習は、わが国海民の信仰として古記にもとりあげられているが、これは蛭子(戒)神の信仰につながる。往時、漁期のはじめに海底の石を拾いあげて祝う習俗があった。いわゆる恵比須石である。古(子)戒姓はこうした蛭子神信仰による苗字であろう。

◇ 山田匡徳と山田有信

ここに日州伊東三位入道の家臣山田土佐入道匡徳といふ軍法者、今佐伯太郎惟定の家にありて、これは在家常の火事にあらず、敵のためあぐる放火なり。さもあらばあれ、人数を堅田中山峠まで打出さんとの儀定まり、惟定も堅田にまで馬を出さるべしと強ひて申さる。匡徳、その儀無用なり、惟定は在城ありて方々の手先き堅め仰付らるべし。野津口、因尾口、切畑口この三口は油断なり難きところなり、(略)堅田に差向はる勢は三段の備なり、先陣の侍大将には佐伯大膳亮惟末、高畑伊豫守。二番備には佐伯久左衛門尉惟澄、高畑新右衛門。三番備の大将には惟定の舍弟進士統幸、若輩ながら望みによりてかくの如くなり、長田天楽を添へらる。堅田三十六人の武士は匡徳に従ひ浮武者たり。(以下略) (大友興廢記から)

これは大友興廢記「堅田合戦」の一節だが、この時(天正十四年十一月)佐伯方の客将であった山田土佐入道匡徳は少年城主佐伯太郎惟定に代って采配をとり、宇目境から堅田平野に侵入してきた薩摩勢(実は日州県の土持

親信と新名党の新名親秀の率いる支隊)を邀撃し、これを潰滅した。山田匡徳は翌天正十五年(一五八七)六月、豊臣秀吉の九州平定によって、島津氏の蚕食していた日向国が高橋元種(臼杵郡県延岡)、秋月種長(児湯郡財部)高鍋、島津豊久(宮崎郡佐土原)、伊東祐兵(那珂郡鉄肥)らに分与され、旧主伊東三位入道義祐の子民部大輔祐兵が鉄肥(日南市)・清武(宮崎市)五万七千石に封ぜられたので、佐伯家を辞して伊東家に帰参した。

山田匡徳(匡得または京得とも書く)は伊東義祐の世臣で、実名は宗昌、通称を次郎三郎、後土佐守と称した。伊東氏の敗亡で豊後に逃れ、後佐伯氏の客将として柁牟礼城にあり、島津方の別動隊を殲滅した。義祐の敗亡から祐兵の再興まで、その間九年余、匡徳の妻と第二人は島津氏の虜となつて薩摩に連れ去られていた。

天正五年(一五七七)十二月、島津氏に敗れ、居城(都於郡城・佐土原城)を奪われた伊東義祐は大友氏を頼つて豊後に亡命した。伊東氏の勢力を日向から一掃した島津義久は急速に要衝を固め、大友氏の攻撃に備えた。すなわち都於郡城に鎌田政近、内山城(東諸県郡)に比

志島国貞、新納院高城（児湯郡）に山田有信、塩見城（日向市）に吉利忠澄らの諸將を配した。

天正六年（一五七八）四月、県（延岡）の土持親成を滅亡させた大友氏は北日向を制圧した。一方、新納院から臼杵郡に手を延した島津氏は親成の甥高信（久綱）を助けて、大友氏と正面衝突する態勢になった。そして八月、臼杵郡牟志賀（無鹿・延岡市）に本営を構えた大友軍は総兵力五万と称し、田原親賢（紹忍）が総指揮をとる、島津軍の第一線を破って長駆南下し、その先陣は島津家久の軍を撃破した。家久は日置忠充らとともに山田有信の守る高城に入り、兄義久、義弘のひきいる島津本隊の援軍を待った。当時高城の守備兵力は五百余、家久・忠充の兵を合せても千数百余にすぎなかった。

大友軍は高城を包囲し、一もみにもみつぶそうとしたが、要害にかまえた孤城の抵抗は強く、加えて総指揮田原紹忍と先陣諸將との間に不和が生じ、徒らに日時を浪費するばかり、十月二十日高城に迫ってから十一月上旬まで、城方との小競合いはあったが戦いらしい戦いはなかった。

島津義久は十一月一日佐土原に着き、日薩隅四万の兵

を結集し、弟義弘は十日財部城（高鍋）を攻略した。不用意に高城川を渡渉して、城に迫ろうとした大友方は城北の沼沢地帯に誘い出され、島津軍の伏兵をうけ、背後から城兵が出撃、敗走する大友軍を挟撃した。さらに耳川で島津軍の追撃にあった大友軍は総崩れになり、二万余にのぼる戦死者を出したと伝えられる。

この時、佐伯紀伊守惟教入道宗天は長子弾正少弼惟真、次子新介鎮忠をともない出陣、高城攻めの先陣をつとめたが、総敗軍となると陣山に残した家臣等に、遺孤惟定のことを託して退却させ、父子三人従士十数人とともに敵中に突入、壮烈な戦死をした。

耳川の戦といわれる孤城高城をめぐる決戦に、城を死守して戦機をまった山田新介有信は島津方屈指の勇将だが、彼は天正十三年（一五八五）大友・島津両軍の戦死者の霊を弔うため、激戦のあった十文字付近に供養塔を建てた。国史跡宗麟原の供養塔である。

私は山田氏を説くにあたって、佐伯氏に因縁の深い山田匡徳と山田有信をとりあげ、この二人についての史談を略記した。山田土佐守宗昌（匡徳）は都於郡城の伊東氏に仕えた世臣で都於院山田（西都市）を出自とする。

また山田有信（新介後越前守）は島津一族、薩摩国日置郡日置北郷山田を領した山田有徳の子、宗麟原供養塔の銘に「源有信山田新介」とある。

◇ 海岸部に多い山田の苗字

山田氏は全国中どこにもある苗字である。佐伯地方でもっとも多いのは佐伯市内であるが、これは各地からの寄り集まりである。聚落的に多いのは米水津村（全域）、蒲江町入津（尾浦・畑野浦）で、この両地域は一岬をへだてた隣接地である。

そこでまず著名な山田氏について述べよう。新編姓氏家系辞書によると、山田直、山田史、山田直主、山田造、山田連、山田宿祢など古代の山田姓から中世の山田姓まで二十六姓氏があげられているが、古代の姓（かばね）はとにかく山田を氏または苗字にした豪族では、清和源氏というものが六氏。藤原氏族が四氏。橘氏族、清原氏族、坂上氏族、大藏氏族、赤松氏族、菅原氏族、穂積氏族、島津氏族、佐々木氏族、小野氏族、浅井氏族、武蔵丹党など各一氏。その他出自不詳のものが数氏ある。

全国の山田姓は約五十五万人を数えるが、それは私た

ちの祖先が山間僻地を開墾して山田をつくったということ、その山田が地名になり、その地におこった氏族の姓氏になったという因縁によるものである。

古姓の山田直は葛城氏族で、欽明天皇の御代、備前児島郡に置かれた屯倉の田令になった、葛城山田直端子に出ている。また山田史、山田造、山田連などはいずれも新羅・百済等の帰化氏族で、山田連と山田造は光仁天皇の宝亀元年（七七〇）山田宿祢姓を賜った。これらは古代から大和・河内・山城・紀伊各国にある山田氏の始祖である。

清和源氏頼清流村上氏族の山田氏は信濃国更科郡上山田に起り、清和源氏満政流八嶋氏族、浦野信濃守重遠の子山田先生重直を祖とする山田氏は尾張国山田郡山田庄を領した。重直の子山田太郎重満の後は二十三家に分かれ、いずれも家紋に「三洲浜」「要文字」を用いる。（寛政重修系譜）清和源氏満季流高屋氏族の山田氏は高屋為経の後平井七郎重綱の子山田八郎実賢に出ている。また佐々木氏流浅井氏族には佐々木宮（近江国）神主従五位下行定の子井上行実を祖とするもの、村上源氏赤松氏族播磨守山田入道生仏（赤松頼則）に始まるものがある。

九州の山田氏で著名なものは、さきに述べた島津一族山田有信や伊東氏の世臣山田宗昌（匡徳）の各山田氏のほか、大蔵氏族大宰少卿原田種直の次男山田次郎種弘に出る山田氏、藤原姓武藤氏族少貳資頼の孫経資の末子貞資の子に山田尾張守資通があり、ともに筑前山田氏といわれている。

豊後山田氏では玖珠清原氏族のものが有名である。前述したように玖珠清原氏は豊後介（但馬介ともいう）清原正高を始祖とし、その子清大輔正通（政道）に五子があり、それぞれ玖珠郡内の地名を名乗り割拠した。長男が長野太郎助道、次男が山田次郎通成、三男が飯田三郎通次、四男が古後四郎通房、五男が野上五郎兼継である。この山田次郎通成の子が山田六郎大夫通綱、その子成綱が豊後山田氏の祖である。しかし、この山田氏は玖珠二十四家の一つで玖珠地方を中心に繁栄したから、佐伯地方にはあまり縁がない。

県南地方にある山田の地名は直入郡に四か所、大野郡に一か所あるが、南海部郡には弥生町に山田内があるばかり、従って佐伯地方の山間部には山田姓が少ない。

それでは佐伯市部をはじめ米水津村、蒲江町入津、鶴

見町松浦、上浦町福泊等に集落的にある山田姓はどこにその起原があるのだろうか。それを解く鍵は山田姓の集落がすべて海岸部にあるということであろう。

米水津村小浦には粟島神社創祀にからまる伝承があり、同村色利の大内浦には漂民伝承がある。また蒲江町入津浦、上浦町最勝海浦には長曾我部残党が落ちて来たという言伝えがある。そのことは豊後水道に面した佐伯湾・米水津湾・入津湾などが、中国・四国方面から落ちてくる人々の来やすい地域ということになる。

伊豫の河野・村上水軍の根拠地大三島に山田の地名があり、豊後水道に面した南豫東宇和郡宇和町にも山田邑がある。また長曾我部氏の本拠に近い香美郡に土佐山田町があり、一条氏領であった幡多郡山奈郷に山田邑（現宿毛市）がある。地名と苗字の関連を考えると、見過せない問題ではなからうか。

（ つ づ く ）